



プラネティストが行く 22

ロシアは中国に 最後は水で勝つ

中村 繁夫

写真・桃井和馬

「5000人の村のなかで、男たちは鉱山労働者として仕事があるが、女性や年寄りには仕事がない」と言いながら79歳のシエベタ会長の目に涙が浮かんだ。ロシアの沿海州でタングステン鉱山の年離れた会長から、木材工場拡大の資金援助を依頼された時の話だ。後で息子さんの副社長に涙の訳を聞いたら、「ソ連崩壊時に失業と食糧不足に泣いた村人たちを思い出したから」とのことだった。

これまでシエベタ会長はタングステン鉱山で儲けた(個人企業の)利益を村の学校、病院、体育館、福祉施設さらに自然環境維持のために使ってきたという。ロシアの鉱山経営は地域と運命共同体として存続するため、鉱山長は村の村長さんと同じ立場なのだ。日本海の真向かいにある沿海州の北の端のプリモルスク鉱山は何もないところだが、人情に篤く、自然を大切にしながら、長期的な視点で真面目に環境負荷の低い鉱山経営に取り組んでいることに驚かされる。例えば、木材資源をとっても大切にすること、鉱山への道を確保するために伐採した木材を利用して坑道の添え木に使ったり、集材材に加工してログハウスを作って外販したりしている。

最近では中国と較べてロシア経済は遅れているのでBRICSからRがドロップした結果、BICS、ドロップだと揶揄されている。ロシアは中国に水をあけられたと言う人が多い。何事においてもロシアは中国と比較されるが、はたしてロシアは中国に敵わないのだろうか? 中国経済が金融危機の後、最も早く軌道に乗ったことは、特に権威主義体制を重要視している国家にとっては、経済成長と民主主義を上手く使い分けている中国的権威主義を真似したい誘

惑に駆られるはずだ。ところが、ロシアは文化的には欧州に近いために中国の経済的成功を羨むことはないようだ。

社会主義体制の中で長年にわたり宗教を否定し、精神的崩壊をも同じように経験した両国民にとって最大の相違点は、自然に対する畏怖の心ではなからうか。極寒の長い冬を経験するロシアの民は素晴らしい春の訪れを喜び、自然を大切にすると伝統が根付いている。現場に行っても感じることは、ロシア（旧ソ連を含めて）の鉱山開発や環境保護の考え方が進んでいることだ。もともと、中国の鉱山経営や冶金の技術は、旧ソ連時代に教えられた技術がベースである。しかし、80年代以降の資源開発優先体制の中で環境維持への意識だけは根付かなかった。

今後、最も重要視されるのは持続的な環境保護の問題である。国連の『水資源に関する報告書』は「2025年には世界の人口のほぼ半分当たる35億人が水不足に直面する」と警告を発している。そのうち、GDP世界第2位になる中国が13億人である。中国では早魃や森林開発によって水資源の増加が見込めず、一人当たりの水使用量をいかに抑えるかが議論になっている。これは国家的な課題であるが、経済発展や環境汚染問題を考えると、中国は世界で最も水問題に対して危険な国家なのである。

一方ロシアを見ると、ロシアには国土を覆い尽くすような森林資源があり、大河や湖に湛えられた豊富な水資源が存在する。地球の温暖化が仮に進んでもロシアにとっては痛痒さを感じられないだけの大自然があるのだ。いずれ、中国は水をロシアから買わなければならない時代が来る。水資源は石油資源よりも貴重な外交カードになる可能性が高いのだ。こうして両国を比較すると意外なことに、これまでは経済発展でロシアは中国に水をあけられてきたが「最後にロシアは水で勝つ」という視点が有力である。

W

〔なかもら・しげお〕1947年生まれ。アドバンストマテリアルジャパン社長。近著に『放浪ニートが、340億円社長になった!』（ダイヤモンド社）
〔ももい・かずま〕1962年生まれ。フォトジャーナリスト。現在、地球写真プロジェクト [EYE WITNESS] を展開中。



シベリアに広がる針葉樹林帯。熱帯雨林が破壊され尽くした今、ここが地球に残る「最後の大森林資源地帯」だと考えられている（当頁）。シベリアの伐採現場で働く男たち（前頁）